

博士論文の要旨及び審査結果の要旨

氏名 FU Gaihua
学位 博士（文学）
学位記番号 新大院博（文）第50号
学位授与の日付 平成26年3月24日
学位授与の要件 学位規則第4条第1項該当
博士論文名 日本語における主語省略の条件についての考察

論文審査委員 主査 准教授 秋 孝道
副査 教授 大竹 芳夫
副査 准教授 三ツ井 正孝

博士論文の要旨

本論文では、日本語における主語省略の条件を明らかにするために、従来の研究よりも広範なデータを対象として主語省略を考察し、単文、複文、連文、テキスト、さらには会話という5つのレベルで主語省略の条件を検討している。その際の基本的な立場は、主語の省略は、話し手が情報伝達を達成するために行う「伝達情報の軽重選択」という発話ストラテジーと密接に関連し、文構成、情報構成、談話構成、コミュニケーション特質などによって制限されるというものである。論文本体（全150頁）の構成は以下の通りである。

第1章 序論

第2章 主語の規定

第3章 主語省略に対する文構成的な条件とその限界について

—— 一、二人称代名詞の省略条件を中心に ——

第4章 複文における主語の省略条件(一)

—— 省略要素の同定を中心に ——

第5章 複文における主語の省略条件(二)

—— 従属節の主語の同一指示関係と省略可能性 ——

第6章 連文における主語の省略条件

第7章 主語省略に対するテキスト的制約要因についての考察

第8章 主語省略に対する会話的制約要因についての考察

第9章 結論

第1章の序論では、主語省略に関する先行研究を検討し、先行研究が持つ問題を明らかにし、それに対する本論文の基本的立場を提示している。

第2章では、先行研究での「主語」の規定を見直し、「主語」の特徴をより明確にして研究対象としての日本語の「主語」の規定を新たに提示している。

第3章では、単文における主語省略を考察対象としている。まず、単文における、ムード、モダリティ、表現類型、視点といった、単文における「主語の人称制限」についての分析概念を確認し、先行研究を踏まえながら、特に、一、二人称代名詞の省略の可否に関する文構成上の条件を再検討している。その上で、文構成上の省略条件を手がかりとして、主語省略が必ずしもコミュニケーションの円滑化に寄与しないことを指摘し、単文における主語省略が人称代名詞の基本的な外界指示機能などによって制限されると主張している。

第4章では、複文における主語省略について考察を進めている。まず、複文における主語はどのような成分を先行詞として選択するか、換言すれば、省略された主語の指示対象はどのように同定されるのかという問題を検討し、7つの主語省略の型が確認できることを示し、久野(1978)が提案した「視点の一貫性」と一連の視点制約を援用して、7つの型の省略条件を詳細に検討している。

第5章では、複文の従属節を中心にして、主語省略文と主語非省略文を比較検討し、複文従属節での主語省略の条件の解明に取り組んでいる。その中で、従属節主語が主節話題・先行話題と一致する場合に主語省略が最も起きやすいこと、視点関係が明確な会話文では話者・聴者と同一指示となる一、二人称代名詞が省略されやすいこと、また、推論に困難さを伴わない総称主語などの場合に主語省略が頻繁に生ずることが明らかにされている。

第6章では、接続詞を伴わない並列文、すなわち連文での主語省略を検討している。連文は、論理的繋がり観点から考えれば、複文とかなりの相似性を持っていると言え、本章での検証の結果、連文の主語省略の分布は複文の主語省略と部分的に類似していることが確認された。しかしながら、連文と複文の主語省略が異なる分布を示す場合があることも同時に明らかになった。そこで、これらの事例を検討し、連文が、文連続を構成しある程度のテキスト性を担うことによって、テキスト構成上の条件を受けるようになることを明らかにしている。

第7章では、テキストのレベルでの主語省略制約の解明を進め、主語とテキスト内の他要素の「結束関係」を考察することによって、結束関係を保証するためのテキスト内的主語省略制約を検討している。日本語における主語省略は、結束的用法でも非結束的用法でも生じ得るので、まず、それぞれの用法での省略例・非省略例の検討を行い、結束的用法では「結束関係」の距離を数値化して考察を進めている。結果として、結束的用法では、結束性が強い場合や、「発話+応答」の会話形式が成立している場合に主語省略が頻繁に生ずるのに対し、テキスト内において「時空間の転換」が発生する場合などでは主語省略が起りにくいことが明らかにされている。これに対して、非結束的用法での主語省略では、外界指示、非特定指示、視点移入などの要因が関与するのに対し、主語の非省略が、注意喚起、文全体の焦点化、話題提起などの要因によって引き起こされていることが示されている。そして、主語省略が「伝達情報の軽重選択」という発話ストラテジーと密接に関連していると主張している。

第8章では、会話における主語の省略および非省略の条件を考察している。会話における主語省略は、テキストでの主語省略の場合と同様に、外界指示や「発話+応答」形式が成り立つ

場合に頻繁に観察され、また主語の話題性が高い場合にも起きやすいことが明らかにされている。これに対して、会話における主語の非省略が生ずるのは、主語が指し示す対象に、話者が何らかの発話態度を表明する場合、また主語が話者によって焦点化されている場合であることが例証されている。これらを踏まえ、主語の省略は、話し手が情報伝達を達成するために行う「伝達情報の軽重選択」という発話ストラテジーと密接に関連し、文構成、情報構成、談話構成、コミュニケーション特質などによって制限されるとする主張が裏付けられると結論づけている。

第9章では、各章の考察・検討結果に基づき、日本語における主語省略の条件を纏めている。

審査結果の要旨

本論文は、先行研究において提案された日本語の主語省略の条件を検討し、新たに、主語の省略は、話し手が情報伝達を達成するために行う「伝達情報の軽重選択」という発話ストラテジーと密接に関連し、文構成、情報構成、談話構成、コミュニケーション特質などによって制限されるという独自の語用論的原理を提案した。そして、この原理に従う形で、人称制限、外界指示機能、指示対象同定、視点一貫性、話題性、テキスト構成、結束関係、「発話＋応答」形式、時空間転換、非特定指示、視点移入、注意喚起、焦点化、発話態度などの多様な条件が相互に作用し、その結果として日本語の主語省略が生ずることを解き明かした。従来の主語省略に関する研究は主語省略の均質性を追求する傾向が強かったが、本研究は、日本語の主語省略の多様性を明らかにしており、この点で優れた研究であると言える。

また、本論文は、上述の語用論的原理が妥当であることを立証するために、従来の研究の考察範囲を大幅に広げ、単文、複文、連文、テキスト、そして会話という5つのレベルの極めて広範なデータを対象として、それぞれのレベルでの主語省略条件を詳細に検討し、さらに、「主語省略が起こりうる」条件の確認に力点を置いてきた従来の研究と対照的に、「主語省略が起こりうる」条件に加え「主語省略が起こりえない」条件の解明も同時に進めた。この結果、本論文は、日本語の主語省略の重層性を浮き彫りにしており、高く評価することができる。なお、テキストと会話のレベルでの主語省略を検討している第7章と第8章については、それぞれ日本機能言語学会と日本語用論学会の審査に合格し、本論文提出者が今年度全国大会で口頭発表を行ったことを付言しておく。

課題を1つ指摘するとすれば、単文における主語省略に関して、発話場面内の非言語的コンテキストが及ぼす影響の検討がさらに必要とされることである。しかしながら、この点を除けば、本論文での議論は十分に説得力を持ってなされて、その議論に基づいて日本語の主語省略の条件の全体像が明らかにされ「伝達情報の軽重選択」に関する上記の語用論的原理の有効性が論証されており、本論文はこの点で語用論・意味論に大きく寄与している。本論文の内容は言語学の分野に即しており、その専門性の深さにおいて、本論文は、博士（文学）の学位を授与するに値するものと判断した。